

#### 第四話

#### かなしい坂 台地への引き込み水路 (府中市)

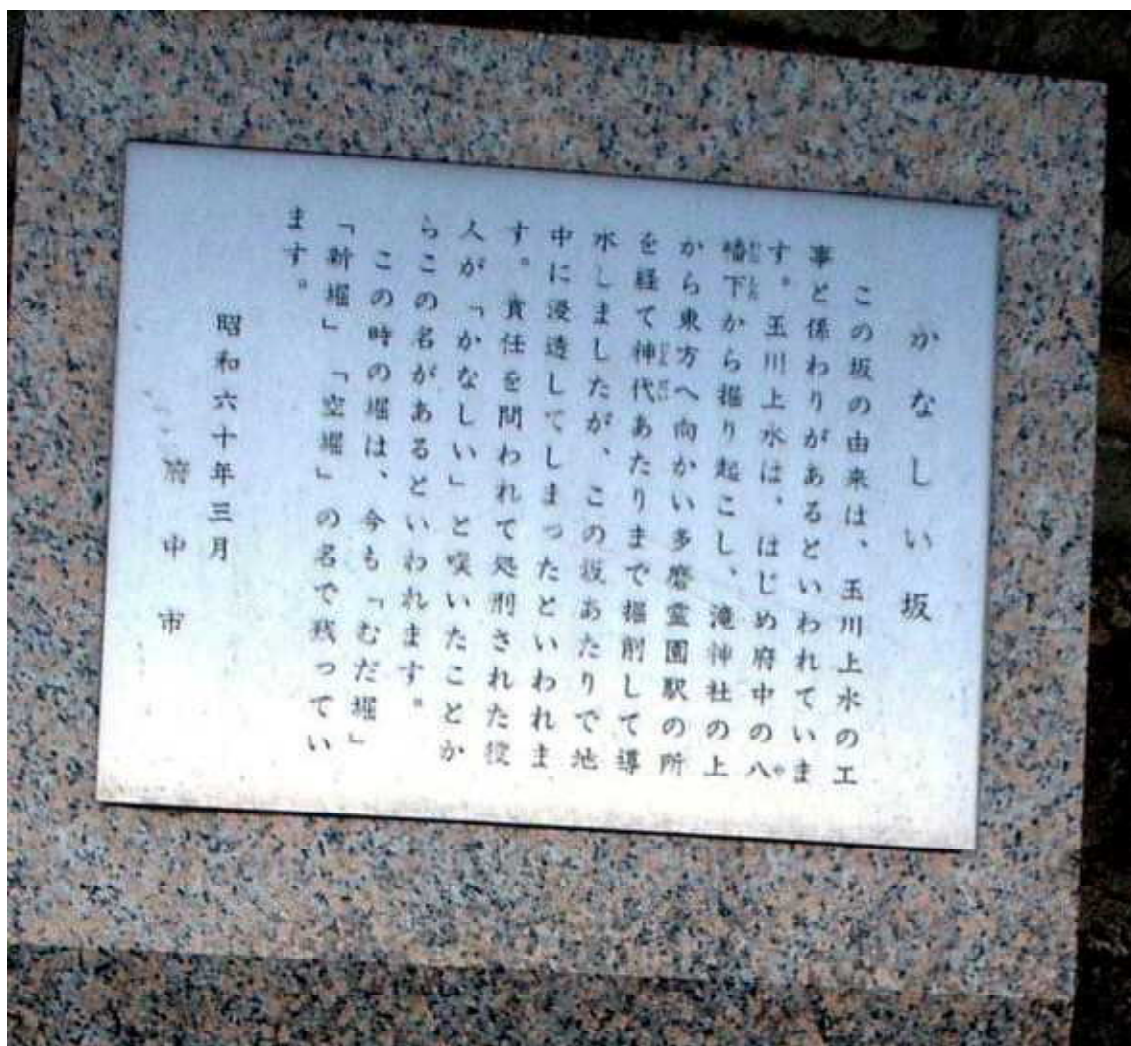


写真7 かなしい坂の碑

京王線多磨霊園から南に通る東郷寺通りの東郷寺下近くに「かなしい坂」の碑がある。碑（写真7）の近くには昔は水路が残っていた。また、京王線多磨霊園駅近くには、「むだ堀」と称される堀があった。多摩川から台地への導水を試みた水路と言われる。東西に流れる多摩川の府中競馬場近くの八幡町（大国魂神社南）から、京王線多磨霊園駅を通過して北上するように掘削したが、途中で漏水層に当たって失敗したと伝えられる。碑によれば、玉川上水に関わりがあるとされている。史跡としてあいまいな、この用水を取り上げた理由は、台地への取水にもかかわらず二ヶ領や六郷用水と同じ水田灌漑水路であることを示すためである。ちなみに、多くの灌漑用水路を持つ大河川、利根川流域では、例外なく用水路は河川から直ちに離れ、灌漑地域へと引き込まれている。用水分配のための合口\*）など、特殊な場合を除き、わが国水田灌漑では一般に見られる用水系である。

台地に水を引き込むならば、台地の地理的、地勢的特徴を考えねばならない。多摩川では特に季節的位変動が大きい。これに対応した堰の構造も必要である。水路を台地の高さまで近づけるには、取水後の水路を下流方向に河川よりも緩勾配で流し、台地に接近させる。これには沖積地水田灌漑水路には見られない取水方式であり、水路には河岸段丘を利用した緩勾配水路が必要である。台地への導水には、場所ごとに高低差があるので、水路配置は全体の地勢で決めねばならない。そのために地形の標高測量が必要になり、精度も高いことが要求される。取水後、用水路を、すぐに台地には引き込まず、長い距離を河川に並行させて流すことになる。

この府中の場合、周辺台地は河川標高よりも数メートル～10m くらい高い。このような高低差を持つ台地に自然流下で水路を引き込むには、多摩川下流方向に少なくとも3km 以上の河川に並行した水路が必要である。さらに「悲しい坂」の水路を新宿四谷大木戸まで延長するには、多摩川取水点を府中競馬場水位として、野川、仙川を横切らねばならない。河川に並行する水路工が考慮されなかったのも残念であるが、広域地形や河川の状況を把握しなかったのが、失敗の根本の原因である。これが次の成功の教訓になったとすれば、せめてもの幸いである。

失敗した場合、責任者は自刃するか、打ち首になるか、大変厳しい責任の取り方が当時の社会通念であった。このような話は水路開所式に成功せず、工事の責任者は自刃したという悲しい話は茨城県鹿島にもある。全国にもそのような話はある。戦時中に大型船の進水式には責任者は懐刀で臨むという話を聞いた。いまでも、わが国の伝統的な律儀な職人氣質が儀式に残っていると思われる。「かなしい坂」はこのことを象徴している。

\*) 合口とは公平な水配分のために、条件の良い位置まで導水して取水すること、またはその施設

~~~~~

次回、第五話 国立市青柳の府中用水に見る水路工